

『古代アメリカ』18, 2015, pp.95-102

<調査研究速報 特集>

## 特集

### 資源化される古代文明

#### — 遺跡の調査と活用に関わるアクター分析 —

## 序論

鈴木紀

(国立民族学博物館、総合研究大学院大学)

### 1. 特集のねらい

本特集の目的は、メキシコの3つの事例から、遺跡の調査と活用に対して向けられるさまざまな社会的関心を浮き彫りにし、それらの間の利害関係を分析することにある。

メキシコでは、これまで、先スペイン時代の文明の実態を解明するために多くの考古学的研究がおこなわれてきた。高度な文明を発達させたメソアメリカ地域の大半がメキシコの国土と重なるため、膨大な考古学の研究課題が存在するからである。しかし、そうした学術的要請だけで考古学研究が展開してきたわけではない。古代文明の遺跡、遺物やそれらに関する知識を積極的に利用しようとする政治、経済的な関心が存在していることを忘れてはならない。

メキシコは19世紀半ば以降、近代国家としての文化的独自性を確立するために先スペイン時代の文明をさまざまな形で用いてきた。落合によれば、20世紀初めのメキシコ革命後に政府が打ち出した文化的自画像は、古代文明に起源をもつ混血文化というものであり、そのイメージの構築のために、考古学は、歴史学や民族学とともに<国家学>として行政の一端を担うようになったといわれる(落合 1996, 1999)。その中心となったのは国立人類学歴史学研究所(INAH)であり、考古学研究の予算は、壮観な建造物や先スペイン時代のエリートに関する遺跡や遺物の研究に集中的に投下されてきた。Navarreteは、このような政策を支える歴史観を「一枚岩的(monolithic)」と呼び、文字通り巨大な石像建造物への執着と、先スペイン時代の先住民と現代メキシコ人とを一枚岩的に連続するものと見なす発想を批判している(Navarrete 2011: 40)。

こうした古代文明の政治的利用は、観光振興の形で経済的な関心とも密接に結びついている。観光客を集め、再訪を促すためには、観光客にとって非日常的な世界が提示され続けなければならない。そのため、古代および現代の先住民文化が格好の素材として注目を集めることになる。初谷は、このような観光客に対する非日常性の演出を「再魔術化」と呼び、メキシコを始めとするラテンアメリカ諸地域で展開する観光の特徴として

指摘する(初谷 2014)。「再魔術化」は文化の演出であり、当然、演出する者とされる者との間で、摩擦を感じやすい。BaudとYpeijは、先住民族文化を利用した文化観光の問題点を、空間と想像力の政治学として捉える。観光地の空間的確定とその所有と管理をめぐる争い、および観光地の文化像の提示とその真正性をめぐる争いが、メソアメリカとアンデス地域を中心に生じていると指摘する(Baud and Ypeij 2009)。

こうした中では、古代文明の研究者がもっぱら学術的な関心から研究をおこなうことは著しく困難であることが明らかだろう。むしろ、研究の評価はアカデミズムの中だけでなく外でもおこなわれるという点を強く認識し、研究計画や研究成果の社会還元の方法を自己点検することが求められているのではないだろうか。配慮すべきは、研究の妥当性はだれがどのように判断するのか、そして研究成果をだれがどのように利用するのかという問題である。

こうした問題意識は近年パブリック考古学という概念とともに普及してきた。MatsudaとOkamuraはパブリック考古学を、考古学と公共の関係性を問い、その改善を図ろうとする問題領域と規定し、そのために教育的アプローチ、広報的アプローチ、批判的アプローチ、多声的アプローチの4つのモデルを提示する(Matsuda and Okamura 2012)。このうち本特集と関連が深いのは、4番目の多声的アプローチである。これは、考古学的遺物の解釈には、考古学者によるもの以外にも、さまざまな人々の解釈が存在することの正当性を認める立場である。この立場を共有しつつ、本特集が重視するのは、第一に、多様な解釈が顕在化する契機として遺跡の調査を計画する段階と、社会的に活用する段階に焦点を当てることである。第二に、多様な解釈は、単に過去に関する観念の差異として存在するのではなく、現実的な利害対立をともなって存在すると考えることである。このように本特集は、パブリック考古学の多声的アプローチに対して、その実例をメキシコの事例から提供するだけでなく、多声性を認識するために理論的な枠組みを提案することを意図している。

本特集によって、会員諸氏が古代アメリカ文明へ向けられる社会的なまなざしについて理解を深め、メキシコおよびその他のラテンアメリカ諸国において市民と考古学との関係改善に少しでも寄与できることを期待したい。

## 2. 古代文明の資源化とはなにか

本研究の中心的概念は「古代文明の資源化」である。ここでその意味を説明しておこう。「資源化」とは、2002年度から2007年度にかけて実施された科学研究費補助金・特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築—象徴系と生態系の連関をとおして」(代表：内堀基光)で提示された概念である。内堀は、資源を「環境の中であって人間にとって役立つもの、利用に供されるものの全て」と捉え(内堀 2007: 41)、資源化とは「あるものが資源となっていくこと」と説明する(内堀 2007: 24)。資源および資源化をこのように平易に定義することにより、通常は資源とはみなされないような多様な事象へ、これらの概念を適用することが可能になった。内堀は、資源人類学を人間と環境、人間と人間の諸関係を照射する人類学の新しいアプローチとして提唱した。

本研究では資源人類学の資源と資源化の概念を受け入れ、「古代文明の資源化」を、古代文明に関する事物が何らかの目的のために利用されることと理解する。この他、資源人類学で用いられている資源利用の主体、生態資源と象徴資源の区別、資源循環といった概念を発展的に継承する。本研究で用いるこれらの概念の意味は次の通りである。

資源利用の主体：資源人類学では、資源を利用する人間を「資源利用の主体」と表現し、個人から人類全体

に至るさまざまなレベルの社会集団を想定している（内堀 2007: 28-30）。本研究でも、このような資源利用の主体の多様性と重層性を受け入れる。一方、補足が必要なのは、「主体」の意味である。内堀は主体という言葉の後に括弧をつけて動作主という言葉で補足しているが、それ以上の説明はしていない（内堀 2007: 28）。動作主とはアクターの言い換えと判断し、本研究では、主体の意味として Long が社会的アクターと呼んだ概念を適用する。Long によれば社会的アクターとは、エイジェンシーを持つ社会的存在、すなわち困難な状況を分析して「適切な」対応策を準備するための情報処理能力と実行力を持った個人または集団のことである（Long 2001:241）。資源利用の主体をアクターとみなすことで、その主体が、問題解決のために手段を選んで資源化を試みる能動的な存在であることを強調することができる。なお資源化の手段とは、資源となる事物に関する知識やそれらを利用するための技術、利用するための政治力や経済力などを想定している。これらを「資源化のための資源」と呼ぶことも可能だが、資源という言葉の用法が煩雑になるので、ここでは資源化の手段としておく。

生態資源と象徴資源：資源人類学では、資源は生態系と象徴系の二領域を持つと考え、その間で前者からは資源材料の提供、後者からは意味の付与という関係が想定されている（内堀 2007: 26-28）。生態系に属する資源、すなわち生態資源とは、ある生態系に包括されるもののうち、そこに生活する人間が有用であると認識した自然物や現象のことであるが、広義には、自然物を利用して人間が加工した道具（生産資源や経済資源）も含まれる（印東 2007: 183-184）。一方、象徴資源とは、生態資源がイデオロギーや権力、宗教概念などと結びついて象徴化されたものと、知識やイデオロギーなど人工的に生み出された非物質的なもの、双方を含む（印東 2007: 184）。

こうした定義に従えば、例えば、先スペイン時代においてピラミッドは、石や日干し煉瓦による建造物という意味では生態資源だったが、王権や神聖性などの象徴という意味では象徴資源だったといえる。一方、現代において遺跡公園のピラミッドは、先スペイン時代と同様の意味だけでなく、遺跡を管理する事業者の経済資源としても生態資源であるといえよう。これに対し、国家の文化的自画像や地域住民のアイデンティティの象徴としては象徴資源である。さらに付言すれば、生態資源と象徴資源の区別は考古学者とも無縁ではない。古代文明の遺跡は、調査研究を通じて考古学者としての生業をなりたせるための資源としては生態資源といえるが、遺物や遺構の意味を解釈し古代文明に関する理論構築をおこなう研究素材としては象徴資源といえることができる。

資源循環：資源人類学では、ある事物が資源化される過程だけでなく、資源として利用された後、やがて資源でなくなる脱資源化の過程も視野に入れ、こうした一連の過程を資源循環と呼んでいる（内堀 2007: 24-26）。これは、資源化のアクターおよび資源化の目的と手段の時代的な変遷の中で生じる現象である。例えば、観光振興を目的にある古代文明の遺跡が資源化されたとしても、観光業者が他の代替観光地により大きな収益性を認めれば、その遺跡は脱資源化される可能性がある。同様に、多くの考古学者が研究する遺跡であっても、他の遺跡の学術的価値が高まれば、その遺跡の研究は減少していくかもしれない。考古学者も遺跡を資源として利用している以上、このような研究の盛衰も資源循環とみなしてよいだろう。

### 3. 古代文明の資源化研究への着眼点

それでは、古代文明の資源化の特徴を理解するために、どのような問いを発すればよいのだろうか。そして、複数の事例を比較するためには何を基準とすればよいのだろうか。ここでは本研究が重視する研究の着眼点を

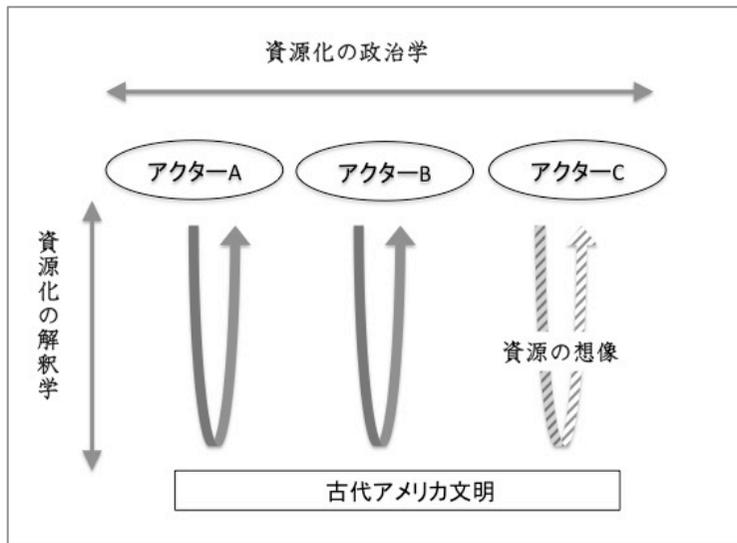


図1 「古代文明の資源化」研究へのアプローチ

3点示したい。それらは、資源化の政治学、資源化の解釈学、資源の想像と呼ぶことができる（図1参照）。

「資源化の政治学」とは、同一の事物を資源化しようとする複数アクター間の関係を問題とする。典型的には、諸アクターの資源化が競合する場合である。その際、全アクターがその資源を生態資源または象徴資源とみなして争う場合と、あるアクターは生態資源、他のアクターは象徴資源として価値を見出し、認識がずれたまま争う場合がありえよう。こうした利害対立に着目し、その経緯や理由を分析したり、調停の可能性を考えたりすることが、資源化の政治学の重要な問いとなる。

「資源化の解釈学」とは、資源化を試みるアクターがその資源や資源化に対して見出している意味を、研究者が解釈する試みである。この解釈の第一歩は、資源化の目的がどの程度満たされたのかを、アクターの視点から考察することである。その結果、アクターがその資源をどのように評価しているかを探ることができる。また当初は生態資源として認識されていた資源にさまざまな意味が付与され、象徴資源としての価値が重要になる場合もあるだろう。さらに、ここでいう価値とは、正の価値だけでなく負の価値も想定しておくべきである。資源化の成果が十分に得られない場合には、その資源はアクターにとって無意味なものとして省みられなくなることもありえる。

「資源の想像」とは、資源に関する仮想的な実体がアクターによって考案されることを意味する。これは例えば、資源化すべき事物の情報が明確でない時や、資源化による目的達成が不十分な場合に、生じる可能性があるだろう。「資源の想像」を研究する上で重要なのは、想像された資源のイメージに誤った解釈や事実の歪曲、他からの流用などがあることを見つけ出し、それを批判することではない。むしろ、どのような状況下に、いかなる想像力が駆使され、それがいかに現実として受け止められるようになるかを見極めることが大切である。

以上3つの着眼点をそれぞれ別々に考察することも可能だが、より重要なのは、相互に関連する問題として考察することである。例えば、異なるアクター間で資源化が競われている状況下で、各アクターはその資源に

どのような意味を見出していくのか。資源の共有から競争へ、あるいは逆に競争から共有へと転換する際には、各アクターにとって資源の意味はどのように変化するのか。資源化の政治的正当性を主張するために、あるいは資源への愛着が増すにつれて、資源にどのような性質が想像されていくのか。このような3つの着眼点を組み合わせた複合的な問いを立て、古代文明の資源化のプロセスを解明することが望まれる。

#### 4. 事例研究の紹介

本特集は、序論以下、文化人類学者による遺跡活用をめぐる調査研究報告2本と、考古学者によるテオティワカンをめぐるメキシコの文化政策に関する調査研究報告1本から構成される<sup>(註1)</sup>。

小林貴徳による「守るべき遺産、活用すべき資源—メキシコ、チョルーラにおける文化的景観をめぐる行政と市民連帯」は、メキシコのプエブラ州のチョルーラ遺跡をめぐる観光開発を扱っている。チョルーラは2012年10月に、メキシコ政府が21世紀型を持続可能な観光開発事業として推進しているプエブロ・マヒコの認証を受けた。資源化の政治学の観点からこの事例で注目されるのは、第一に、ライバル関係にあったサン・アンドレスとサン・ペドロの2市の市民の間に連帯感が生じたことである。第2に、当初の官民の協力関係が、次第に両者の対立へと変化したことである。認証取得のために行政と両市の市民が協力して環境整備や情報収集をおこなっていたが、認証取得後、チョルーラ遺跡周囲のテーマパーク建設案が具体化するにつれ、官主導の運営に市民たちは反発を覚えたという。資源化の解釈学の視点からは、「チョルーラを守る連絡会」を結成した市民たちの動向が重要である。会の活動を通じてチョルーラ遺跡への愛着を強め、それを守る者としてこれまでの2市間の対立を超えた新たな市民意識が育まれているという。市民たちの間では、遺跡とその周辺の土地はもはやプエブロ・マヒコ事業のための生態資源としてだけでなく、両市の連帯を意味する象徴資源としても価値をもち始めたと思ふことができよう。

続く杓谷茂樹による「資源としての『古代都市チチェン・イツァ』—交差するステークホルダーそれぞれの思惑と地元露店商」は、メキシコ、ユカタン州のチチェン・イツァ遺跡における露店商の不法占拠問題を扱っている。古典期後期から後古典期にかけて栄えたマヤ遺跡チチェン・イツァは、多くの観光客を集め、ユカタン半島のマス・ツーリズムの拠点となっている。遺跡周辺に居住するマヤ・ユカテコ民族は、観光客向けの土産物販売に従事する者が多く、再三の取り締まりにもかかわらず、遺跡へ不法侵入が常態化している。資源化の政治学の視点では、この事例もまた、資源化を試みるアクター間の複雑な利害関係の表出であるといえる。遺跡管理を行う行政側は、INAHとユカタン州政府に分断されており、遺跡に観光客を送り込む観光業者側にも、ユカタン州の観光資本と、キンタナ・ロー州のカリブ海岸リゾート地帯に基盤を置く新興観光資本の間の対立がみられる。地元の露店商たちは、こうした異なるアクター間の間隙をつく形で自分たちの生存機会を確保しているのである。資源化の解釈学の視点からは、露店商の態度に注目すべきである。不法侵入はチチェン・イツァを彼らなりに生態資源化する手段であるが、その行き過ぎは観光地としてのチチェン・イツァの価値を減じることになり、やがて彼ら自身の不利益につながることになる。このような状況下で、露店商たちは今後、どのような判断をしていくのだろうか。また杓谷によれば、今のところ露店商は、自分たちのマヤ民族性を根拠に不法侵入の正当性を主張してはいないという。これはチョルーラ周辺の市民たちが、テーマパーク建設に反対するなかで、自分たちのアイデンティティを覚醒させていることとは対照的である。露店商がチチェン・イツァをどのように意味づけ、象徴資源化していくのか、あるいはもしそれを試みないとすれば、それはなぜなのか、今後も注視する必要がある。

福原弘識の「考古学者による古代遺跡の資源化とそのジレンマ—国家的モニュメントとしてのテオティワカン」は、考古学者の立場から、メキシコのテオティワカン遺跡に学術調査が集中する現象を批判的に検討するものである。テオティワカンは年間 250 万人以上の見学者を集めるメキシコ有数の観光地であり、同時に、メキシコの国家的モニュメントとして機能している。したがってメキシコ政府は、学術予算の配分においてテオティワカンの調査を優先する傾向があり、結果的にテオティワカンはメキシコにおける考古学的雇用の重要な供給源ともなっている。これに対し福原は、学術的観点から、テオティワカンをよりよく理解するためには、その周縁部の小規模集落遺跡や、テオティワカンに先行する時代の遺跡の調査が不可欠であると指摘する。資源化の政治学の視点では、この事例は、テオティワカンの集中的調査を推進する INAH と、その集中に批判的な考古学者との間の、資源化すべき遺跡の選択基準をめぐる対立とみることができる。資源化の解釈学の視点からは、メキシコ政府にとってテオティワカンは、経済振興のための生態資源としても、国威発揚のための象徴資源としても揺るぎない存在であることが明らかである。一方、INAH のプロジェクトに参加してテオティワカン調査に従事する考古学者にとっては、雇用の源という意味でテオティワカンは重要な生態資源であるが、テオティワカン周辺やその他の遺跡の学術調査を重視する考古学者にとっては、象徴資源としてのテオティワカンの価値は他の遺跡と比較して絶対的とはいえない。こうした中、生態資源としてテオティワカンに依存している研究者がこの状況を打開できる見込みは低いが、福原は、国外から研究資金を調達できる考古学者の役割が重要であると考え、彼らが中心となり、他の遺跡との関係性を踏まえたテオティワカン像を仮説として構築し、調査を通じてそれを検証することにより、INAH やテオティワカン研究に従事する考古学者に新たな展望を与えることができるかもしれない。この仮説検証の作業は、考古学者によるテオティワカンに関する「資源の想像」の積極的な展開とみなすことができるだろう。

## 5. 資源化をめぐるアクター分析

以上 3 事例をもとに古代文明の資源化を試みるアクターの関係性を整理しておこう。まず遺跡調査の計画段階としてはテオティワカンの事例に着目する。資源化のアクターとしては、文化政策を担うメキシコ政府の行政機関と実際の発掘調査を行う考古学者が存在し、考古学者の中にも、雇用条件や研究費の取得状況に応じてテオティワカンの資源化に関する態度が分かれる。また地元住民の間でも、観光業に従事者などテオティワカンから利益を上げている者と、土地利用を制限されている地権者など発掘作業から不利益を被る者が存在する。学術的発展を重視する考古学者は、テオティワカンにこだわらず、その他の遺跡も調査すべきだと考えるが、行政側は、発掘後の遺跡の政治、経済的な価値も考慮せざるをえず、テオティワカン調査を優先する。前者は遺跡を主に象徴資源として捉え、後者は生態、象徴両面に目を配っているといえる。しかも両者の齟齬は、テオティワカンの発掘が実質的に唯一の研究機会となっている多くの考古学者の存在によって、未解決のまま放置されてしまう。彼らにとってテオティワカンは生存のための生態資源であり、その事実は政府の方針と矛盾しないからだ。さらに地元住民にとっては、基本的にテオティワカンは経済活動のための生態資源であり、その生業の種類に応じて、テオティワカンの更なる資源化への賛否は二分されている。したがって、メキシコ中央高原古典期に関する考古学的研究の刷新を志す研究者は、テオティワカンの学術的な価値を相対化するだけでなく、政治、経済的な価値をも相対化していくような展望を持つ必要があるといえるだろう。

次に遺跡を観光資源として活用する段階ではチョルーラとチチェン・イツァの事例が該当する。両事例に共通するのは、資源化のアクターとして行政と地域住民が存在し、それに観光資本が関与しながら遺跡とその周

辺の土地利用が争点になるという点である。これは生態資源としての遺跡をめぐる争いといえるが、チョルーラの市民組織のように、自分たちの資源化を主張する過程で遺跡に新たな意味を読み込むアクターが現れると、問題はより複雑になる。遺跡はそのアクターに固有の象徴資源となるため、対立するアクターがそれを共有することはきわめて難しくなるだろう。

研究の現段階で両事例の解決策を構想することは難しい。仮説的な方針を述べれば、生態資源をめぐる争いの場合、観光開発の内容を話し合い、各アクターが自己の利益の取り分を確保することが基本となるであろう。一方、象徴資源をめぐる争いの解決は、それぞれのアクターが他のアクターが遺跡に対して抱いている意味を尊重することであり、可能ならば、共通の意味を紡ぐことではないだろうか。そしてこの2つの解決策がどのように影響しあうのか見ていくことも、今後の研究の課題である。

最後に、こうした古代文明を資源化するアクターたちの関係を分析することの実践的な意義を述べておこう。考古学者が自分自身を資源化するアクターと認識することはきわめて重要である。そう自覚することで、自分を国家や地域住民など他のアクターと同列に置く事が可能になり、対等な立場で利害関係の調整にあたろうとする心構えができるだろう。またこうしたアクター分析を、争っている当事者に伝えることも重要である。研究者が必ずしも中立的な立場に立てるわけではないが、文化人類学者が各アクターの目的と手段、および係争中の資源に対する思いを鳥瞰図として示し、アクター間の相互理解を促すことは可能であり、また期待される貢献であると思われる。

## 註

(註1) 本特集は、2015年5月30日に日本ラテンアメリカ学会で実施した分科会「現代メソアメリカ社会における古代遺跡の保存と活用—文化資源の管理をめぐる学際的パースペクティブ」(代表:小林貴徳)における発表の中から、一部の発表に加筆して調査研究速報として編集したものである。

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」(領域代表:青山和夫、課題番号26101001)およびその中の計画研究A04「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」(代表:鈴木紀、課題番号26101005)の研究成果の一部である。

## 参照文献

Baud, Michiel, and Annelou Ypeij eds.

2009 *Cultural Tourism in Latin America: the Politics of Space and Imagery*. Koninklijke Brill NV, Leiden.

初谷讓次

2014 「観光におけるコミュニケーションな再魔術化の可能性」天理大学アメリカス学会編『アメリカスのまなざし—再魔術化される観光—』、pp.4-14、天理大学出版部、天理。

印東道子

2007 「生態資源の利用と象徴化」内堀基光編『資源と人間—資源人類学01』、pp.183-208、弘文堂、東京。

Long, Norman

2001 *Development Sociology: Actor Perspectives*. Routledge, London.

Matsuda, Akira and Katsuyuki Okamura

- 2012 Introduction: New Perspectives in Global Public Archaeology. In *New Perspectives in Global Public Archaeology*, edited by Akira Matsuda and Katsuyuki Okamura, pp.1-18, Springer, New York.

Navarrete, Federico

- 2011 Ruins and the State: Archaeology of a Mexican Symbiosis. In *Indigenous Peoples and Archaeology in Latin America*, edited by Cristóbal Gnecco and Patricia Ayala, pp.38-52. Left Coast Press, Walnut Creek, CA.

落合一泰

- 1996 「文化間性差、先住民文明、ディスタンクシオン - 近代メキシコにおける文化的自画像の生産と消費」『民族学研究』61(1):52-80。

- 1999 「政治的資源としてのインディオ文明 - 19-20 世紀メキシコにおける文化的植民主義と自己成型」田村克己編『20世紀における書民族文化の伝統と変容4 文化の生産』pp.138-158. ドメス出版、東京。

内堀基光

- 2007 「序 - 資源をめぐる問題群の構成」内堀基光編『資源と人間 資源人類学 01』pp. 15-43、弘文堂、東京。

原稿受領日 2015年9月25日

原稿採択決定日 2015年10月12日